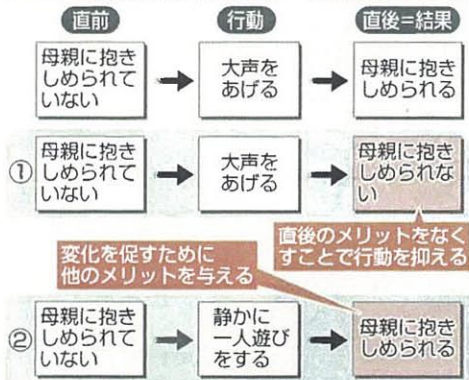


文化ぶん・くら暮らし

奥田さんの二つの「処方箋」



子どもが突然叫び出し、心配した母親が抱きしめると一時的に静かになるが、行動はくり返される。行動を変える糸口はあるのか。自閉症や発達障害の支援を国内外で行う専門行動療法士で臨床心理士の奥田健次さんは、

「原因を行動の『結果』に求めることで、問題解決の糸口はつかめる」と主張する。このほど講演会で来県、子どもの発達をサポートする考え方を示した。

〈戸松優〉

子どもの発達サポート 専門家・奥田さん語る

行動の原因を探る思考法を「眼鏡をかける」という日常的な行動を例に説明する。なぜ眼鏡をかけるのか理由を考える時、「視力が弱いから」と答えるケースが多い。しかし、奥田さんが専門とする行動分析学では行動の原因を「行動することによって直後に得られた結果」に求める。「よく見えるようになる」という結果(「メリット」)があるから行動する。行動したのは、よく見えるという結果が待っているからだ」と奥田さんは補足する。

陥る循環論

自閉症や発達障害の子どものサポートするため「結果から行動の原因を捉える」考え方を現場で応用してきた。自閉症と診断された2歳男児のケース。突然大声で叫ぶといった行動が見受けられた。行動の理由として「情緒不安定で興奮が高まったから」などと考

行動変える糸口「結果」に

教育・若者

型にはまらない発想で分析

えられることが多い。だがそれでは「興奮が高まる→大声で叫ぶ→さらに興奮が高まる」という循環論に陥り、行動そのものを変化させる糸口は見えないままだと反論する。

奥田さんは、叫んだ直後に母親が男の子を抱きしめているという行動の「結果」に着目。男の子にとっては「母親に抱きしめられる」という好ましい結果があるから叫ぶのだと分析した。

母親に「強烈な方法だから覚悟をしてほしい」と前置きし、奥田さんが出す、処方箋は①子どもが叫び出しても背を向ける②静かに一人遊びをしている時にたくさん抱きしめる、②点。

二つの意図

処方箋には二つの意図がある。①母親の対応が以前と異なることで叫ぶ回数は一時的に増加するが「抱きしめてもらえろ」という叫ぶことのメリットが無くなる②静かに一人遊びをするという行動に、「抱きしめられる」という新たなメ

リットが生まれ「一人遊び」という行動が増える。2カ月後には大声で叫ぶ回数がゼロになったという。

「大胆で、冷淡にも見える処方箋のため、異端視されることも多い」と奥田さん。自身に子どもはいないが、「他人の子どもを育てる仕事」のプロフェッショナルという自負がある。2012年には行動分析学の学びや「行動コーチングアカデミー」(長野・御代田町)を設立。自閉症や不登校などの問題解決に取り組んでいる。

「この仕事をしていると、障害、健常の境界線も分からなくなってくる。自閉症でも幸せに生きている子どももいれば、高学歴で大企業に勤めてもうつになる人がいる…。幸せの尺度は一つじゃないと教えられる」。既成の考え方にとられない発想で、子どもの発達を支援している。

奥田さんは14日、高校生のための文化講演会(山梨日日新聞社、山梨放送、一ツ橋文芸教育振興会主催)で峡南高、市川高を訪れ、「メリットの法則」などについて講演した。



「行動分析学は心理学の一分野で、子どもの問題行動の原因を探り、変化を促すのに実効性が高い学問」と話す奥田健次さん

＝身延・峡南高

おくだ・けんじさん 1972年兵庫県生まれ。専門行動療法士、臨床心理士。桜花学園大大学院客員教授。著書「メリットの法則 行動分析学・実践編」(集英社新書)、「子育てシンプル」(一ツ橋書店)など。